3－1　British Library 所蔵の外邦図について

長谷川孝治（神戸大）

I　はじめに

1990 年代以降、欧米においては地図と戦争、軍事の関係についての論議が高まりつつある。国際地図史学会（ICHC）でも、毎回 Maps and War のセッションが設定され、またイギリス戦時部が所蔵する 1881-1905 年の 2,000 葉の地図を目録化した、A. C. Jewett: *Maps and Empire*, 1992 や、インドの地図化と大英帝国の関係を論じた、M. H. Edney: *Mapping an Empire*, 1992 なども刊行されている。こうしたグローバルな潮流の中で、外邦図を再吟味することを意図したい。

II　British Library 所蔵の外邦図

イギリスでは、2000 年 1 月から 4 ヵ年で、国防省（MOD）及び公文書館（PRO）が所蔵する 1881-1968 年の約 20 万葉の地図を歴史的資料として英国図書館（BL）へ移管するプロジェクトが進行中である。この中には、参謀本部地理局（GSGS）所蔵図をはじめ、中東などの地域紛争時の応急図、米国国防総省軍事測量局との共同作成図などが含まれており、外邦図は GSGS 内の戦時部で所蔵されていた。BL の地図部（ML）では、外邦図を CD-Rom 版カタログに収録（シリーズ名のみで、個別図の検索は不可）しているほか、大型索引図も作成しており、それらを CD-Rom ないしハードコピーで入手した。

索引図化されている主要なシリーズは、①陸地測量部作成(1941-44 年)の 1:100,000 図（満州、シベリア、樺太等）、②参謀本部・陸地測量部作成の 1:100,000 図（満州、モンゴル等）、③関東軍指令部作成(1941-42 年)の 1:100,000 兵要地誌図（西伯利、極東、東「ソ」、満州、蒙古の各十万分一図に軍事情報を加刷、計 244 葉）など、中縮尺図がほとんどである。したがって現段階では、日本で所蔵していない外邦図を発見する可能性は少なく、むしろ MOD に依然留置されている外邦図の探索や、それらのイギリスへの接収等の来歴を解明することに意味があると思われる。

III　外邦図原図の探索

外邦図は、①台湾、南樺太、朝鮮半島、南洋諸島あるいは満州などのように日本が植民地化した地域を、自らの測量により地図化、②シベリア、蒙古、中国本土などのフロンティア地域を、空中写真や秘密測量などによって地図化、③東南アジアからインド、アメリカ合衆国、オーストラリアなどの外縁部を、既製図を利用して改訂複製、という 3 類型が設定されうる。

今回の BL での調査では、③の典型的な事例であるインド関係外邦図を、原図と比較することに着手した。すなわち東洋・インド史料部（OIOC）が所蔵するインド測量局作成の 1 インチ図(1:63,360)と 1/4 インチ図(1:253,440)の原図を CD-Rom 版で入手し、それぞれと外邦図の「五万分一印度図」、「二十五万分一図印度」と対比し、差異の有無を検証した。その結果、五万分一図では、原図を「五万分一ニ伸寫シ五色ニ複製セルモノナリ」と備考で述べるように、縮尺をメートル法で拡大し、7 色を 5 色に減じる操作を行なったことが確認できたが、それ以上に整飾部の凡例が大幅に拡充され、読図に益する情報が付加されていることが注目された。内容的には、橋・細流・堤防など水部、土地利用、地名ランクなどであり、地図そのものの日本語への改訂が困難なため、凡例の説明で補ったことが明瞭である。「二十五万分一図印度」でも同様な操作が行われたことが認められる。

Ⅳ　おわりに

BL の地図部及び東洋・インド史料部での予備調査は以上のようであったが、今後はアメリカ合衆国での所蔵状況と比較すると同時に、インド以外のマレー、香港など旧イギリス植民地の原図と外邦図の対比を継続し、「帝国の可視化」としての外邦図を追究していきたい。